

臨床の倫理を問い直す

—AI との接点が照らす判断の構造—

畑 中 千 紘

昨今、心理療法のセッションにおいて「ChatGPT に相談していたのですが……」と語るクライアントが急増したように思う。面接と面接の合間に生成 AI と対話していたことを報告される経験は、今後さらに増加していくことだろう。生成 AI はブレーストーミングに活用されることも多いが、あるテーマに関して多角的な視点から知識や考えを即時に提示してくれるため、思考を深めたり広げたりしようとする際の補助的存在として有効性が高い。従来のネット検索ではキーワードに依存する傾向が強かったが、たとえば「京都大学から京都駅に向かいたいが、途中で多目的トイレを利用しやすいルートはどれか」といった個別の文脈や条件に即した問いにも対応できる点が、人々が生成 AI に「相談したい」と感じる理由の一つといえるだろう。

いま、虐待、引きこもり、家庭内暴力、自死など、複雑かつ重層的な課題が増加するなか、若者の心理的支援のあり方が改めて問われている。2017 年に座間市で発生した連続殺人事件は、SNS を通じて自殺願望を抱える若者が加害者に接触し、結果として 9 人が殺害されるという極めて痛ましく衝撃的な事件であった。この事件を契機として、国はオンラインでの若者の心理的ケア体制の充実に本格的に取り組み始めた。LINE などのアプリを活用した SNS 相談は、匿名で自宅などどこからでもアクセス可能というアクセシビリティの高さから、導入当初から予想を超えるニーズが確認された。非接触型の相談であることから、2020 年以降の新型コロナウイルス感染症の蔓延期にも急速に拡大し、現在もその勢いは衰えていない。しかし、SNS 相談に臨床心理士や公認心理師が本格的に参入するには、いまだ多くの課題が残されている。背景には対面相談に比べて時間的負荷が大きいこと、チャット形式での相談への懷疑や抵抗感などの要因があり、研修を受けた非専門家や福祉士、保育士など他領域の専門職が担う相談が多くを占めているのが現状である。

こうした状況に対して、AI 技術の進展が新たな道をひらいている。すでに AI チャットボットが対応するカウンセリング事業は複数運用されているが、相手が人間ではないことによる気軽さもあって、世界的に見ても利用者は増加傾向にある。他方、感情を伴わない表面的な対話をもたらす危険性も明らかになりつつある。共感的な応答を繰り返す生成 AI に対しては、かねてから依存性の高さが指摘されていたが、ついに海外で未成年の利用者が自死に至る悲しい事例が報じられた。この問題を受け、OpenAI は 2025 年 9 月に、未成年の利用を保護者が管理・監視できるペアレンタルコントロール機能の導入を発表した。保護者は子どもの利用状況を把握し、チャット履歴やメモリ機能の制御が可能となるほか、AI が深刻な心理的苦痛を検知した際にはリアルタイムで通知を受け取る仕組みも備えられる予定である。しかし、これは責任の所在を企業から保護者へ移管しようとする試みにすぎず、根本的な解決とは言い難い。

自然言語処理 (NLP) の技術的発展が、臨床実践における AI と人間との協働に肯定的な影響を与えているのもまた事実だ。症状記述や面接記録の分析 (Forsyth et al., 2018; Masukawa et al., 2022)、さら

には訓練支援への応用 (Zhou et al., 2023) が進みつつあり、臨床実践の一部を技術的に補完する可能性が広がっている。AI は大量の言語データを処理し、統計的なパターンに基づいて要約や分類を行うことができるため、教育や研究の場面では今後も一定の有用性を示していくだろう。

臨床心理学の営みは、常に「見立て」のような臨床的判断と関係性の間で揺れ動いてきた。クライアントの語りに耳を傾け、症状の背景にある文脈を読み解き、介入のタイミングを見極める——こうした一連のプロセスには、単なる知識の適用を超えた、暗黙的かつ状況依存的な判断が求められる。臨床家は、言葉にならない感情の揺らぎや、非言語的な兆候を手がかりに、目の前の語りをどのように理解し、どのように応答するかを瞬時に選び取っている。

AI がこうした臨床的判断を「模倣」することは可能なのだろうか。あるいは、模倣の限界こそが、臨床の本質を照らし出すのではないか。この問いは、単なる技術論を超えて、臨床心理学の根幹に関わる哲学的・実践的な問題を孕んでいる。たとえば、AI が生成する言語には、表面的な「らしさ」が備わっていても、文脈の深部にある意味や関係性の重みを捉えることは難しい。疑似的理解 (pseudo-understanding) や「ポチョムキン理解」(Mancoridis et al., 2025) などの概念は、AI が生み出す表面的なカウンセラーらしさの限界を示すと同時に、人間の判断がいかに複雑で多層的であるかを逆照射する。臨床的判断とは、単なる情報処理ではない。それは、クライアントとの関係性の中で生成される、文脈的かつ倫理的で象徴的意味を含んだ創造的なやりとりである。2025 年現在、大規模言語モデルはインテーク報告のようにコンパクトにまとめられたケース記録に対しては、ある程度正確な「見立て」を示すことができる。限られた言語的情報から、考え得る病態や症状の可能性を多方向に展開するため、生成された見立ては一見「優秀」に見える。しかし、事例研究論文のような一定の長さの流れをもった経過報告に対しては、AI はほぼ理解ができず、誤った情報を次々とねつ造する現象さえ観察されている。言語で直接表現され得ない象徴的次元や身体的次元で、人間は何を体験しているのか——この問いは、AI の限界を考えるうえで避けて通れない。

臨床的判断とは何か、そしてそれはどこまで技術的に再現可能なのか。こうした問いに対して、単一の答えを提示することは難しい。しかし、心理学と情報科学という異なる専門領域の知見を交差させることで、臨床的思考の構造や条件をより明瞭に描き出すことは可能であろう。臨床心理学の現場においても、AI の活用は慎重な検討と倫理的配慮が不可欠であり、人間の判断と関係性の重みを置き去りにしないことが求められている。AI を単なる道具としてではなく、臨床的思考を問い直す鏡として捉えることで、判断の速度、曖昧さへの耐性、そして関係性の重みといった、臨床実践を人間が担うことの意味が改めて浮かび上がってくる。AI が提示する“らしい”答えと、人間が選び取る“らしくない”判断とのあいだにあるズレこそが、臨床の創造性と倫理性を支えているのではないか。こうした問いについて考え続けることが、心理学と情報科学の創造的な架橋を促し、新たな臨床的知を生み出す契機となることを期待したい。

文 献

- Forsyth, A. W., Barzilay, R., Hughes, K. S., Schrag, D., & Deneault, A. (2018). Machine learning methods to extract documentation of breast cancer symptoms from electronic health records. *Journal of Pain and Symptom Management*, 55(6), 1492–1499. <https://doi.org/10.1016/j.jpainsymman.2017.12.479>
- Mancoridis, M., Weeks, B., Vafa, K., & Mullainathan, S. (2025). Potemkin understanding in large language models. arXiv. <https://arxiv.org/abs/2506.21521>
- Masukawa, K., Aoyama, M., Yokota, S., Nakamura, J., Ishida, R., Nakayama, M., & Miyashita, M. (2022). Machine learning models to detect social distress, spiritual pain, and severe physical psychological symptoms in terminally ill patients with cancer from

unstructured text data in electronic medical records. **Palliative Medicine*, 36(8), 1207–1216. <https://doi.org/10.1177/02692163221090266>

Zhou, Y., Chen, L., Gupta, R., & Patel, M. (2023). Large language models as simulated patients: A pilot study in medical interview training. *Journal of Medical Education Technology*, 30(2), 115–124. <https://doi.org/10.1016/j.jmededtech.2023.02.004>